

# 平成 29 年度白滝ジオパーク研究助成報告書

東北大学大学院文学研究科 博士後期課程

青木要祐

## 研究課題名「遠軽町タチカルシュナイ遺跡群の現代的意義の確立」

### 1. 現状と課題

北海道紋別郡遠軽町字向遠軽に所在するタチカルシュナイ遺跡群は、1958年に初めての発掘調査が行われ近年も東京大学により調査が行われているなど、北海道の先史時代研究において著名であるとともに、近年再び注目を集めている遺跡群である。約60年間で7遺跡（ないし7地点）、11次にわたる発掘調査が行われた（第1表）。その結果、遺跡群は後期旧石器時代から縄文時代草創期にかけての遺跡を中心に構成されること、北海道では数少ない石器群の層位的出土例がみられることが確認されている。しかしながら、多くの調査は概要報告書しか刊行されておらず、十分な整理がされているとは言いがたい。そのうえ、出土資料は道内・道外数か所に分けて保管されており、行方不明の資料もあるなど、I) 貴重な資料であるにも関わらず散逸状態にあると言っても過言ではない。また、多くの調査が数十年前に行われていることから、II) 調査自体の詳細が不明である。そして、III) 文化層の年代も測定されていないため、層位的出土という強みを活かしていないのが現状である。

### 2. 研究の目的と方法

#### I) 目的

本研究では、タチカルシュナイ遺跡群の研究史・資料の現状を明らかにし、今後の研究の礎となるデータの蓄積、過去調査で採集された年代測定用試料の確認、そして遺跡群の現代的意義の確立を目的とした。

本研究で過去に行われた調査の詳細及びその資料について明らかにすることにより、近年学術的注目を集める遺跡群の現代的意義が確立され、今後の再整理・研究成果をより優れたものとする。また、本研究により年代測定に適した試料を確認できれば、今後測定することにより過去に確認された層位的出土という成果を活かすことができ、北アジアの先史

第1表 タチカルシュナイ遺跡群の主な発掘調査

調査年	遺跡・地点	主な調査機関・参加者
1958	タチカルシュナイ遺跡	芹沢長介・吉崎昌一・遠間栄治
1971	タチカルシュナイ遺跡第Ⅰ～Ⅳ遺跡	北海道大学・帯広畜産大学など
1972	タチカルシュナイ第Ⅴ遺跡	北海道大学・帯広畜産大学・東北大学など
1978・1983～85	タチカルシュナイ遺跡M-1地点	筑波大学・湧別川流域史研究会
1996	タチカルシュナイ遺跡M-1地点	國學院大學・湧別川流域史研究会
2016・2017	タチカルシュナイ遺跡M-1地点	東京大学

時代研究を大きく進展させるものとなる。また、過去の調査から数十年が経過したタチカルシュナイ遺跡群の現代的意義を明らかにすることで、新たな発掘調査を行うことなく学術資料の蓄積と情報発信、白滝ジオパーク地域の魅力の再発見が期待できる。

## II) 方法

本研究では i) 調査記録の収集、ii) 各収蔵先での現状把握 を行い、可能な物に関しては iii) 調査記録のデジタル化・資料の図化 を行った。上記 i ii iii のために、資料調査を遠軽町埋蔵文化財センター、札幌国際大学、明治大学で実施した。

## 3. 研究の成果

### I) 各遺跡・地点の概要

本遺跡群で過去に行われた発掘調査は第 1 表の通りであるが、ここでは本研究の資料調査によって特に成果のあった 3 遺跡についてのみ記述する。

#### a) タチカルシュナイ遺跡 (1958 年調査)

1958 年に芹沢・吉崎・遠間の三氏を中心として発掘調査が行われた。調査時には a・b・c・d・e・e' の 6 地点に石器の散布が認められ、調査は b・c 地点に限って行われたとされる (芹沢 1962) が、現在東北大学・明治大学には B・C・D・E・E'・E''・pit の 7 地点の注記がなされた石器が保管されている。両大学に保管されている資料は、芹沢氏が 1963 年に明治大学から東北大学へ転出した際に分かれたものと推測できる。それぞれに 200~300 点程の石器が保管され、合わせると約 550 点となる。双方の注記形式は共通し、遺物番号は連番であることから一体の資料であったことがうかがえる。

資料には地点ごとの遺物番号が振られており、それを基に地点ごとの出土点数を把握できる。その結果、B 地点では 350 点、C 地点では 134 点、その他の地点ではそれぞれ 10~20 点ほどの石器が少なくとも出土していることが確認できた。B 地点では白滝型細石刃核やそれに伴うスポール類、広郷型細石刃核、細石刃、荒屋型彫刻刀形石器がみられ、C 地点ではホロカ型細石刃核や両面調整石器、舟底形石器が確認できる。これらの組成は芹沢氏による概報 (芹沢 1962) とも整合する。現在整理中のため詳細は別稿に譲るが、東北大学保管資料の一部に関しては企画展展示図録 (東北大学大学院文学研究科他編 2016) に掲載しているためそちらをご参照いただきたい。

#### b) タチカルシュナイ第 II 遺跡

1971 年に林道工事に伴って発掘調査が行われた。剥片が 76,351 点、ツール類が 8,662 点出土したとされ、このほかに出土した碎片を合わせた総点数は 10 万点を上回るとされる。

概報 (吉崎 1972) では多くの白滝型細石刃核や荒屋型彫刻刀形石器が出土したと記載されているが、その他に湧別技法札滑型の工程で削出されたと思われるスキー状スポールや峠下型細石刃核が含まれることを筆者の実見で確認している。白滝型細石刃核及びスキー状スポールの接合資料も複数存在する。

概報では「遺物が堆積していく過程と、背後から流れ込んでくる礫、砂質粘土が堆積した過程が同時に進行した」（吉崎 1972: 9-10）とされており、出土遺物が単一文化層のものか、複数文化層が混在するものなのか、当時の調査図面等を確認できていない現状では判断しがたい。しかしながら、白滝型細石刃核が複数出土し、接合資料まで得られている遺跡は道内でも数少ない。現状のままでも貴重な資料といえる。

なお、遺物を保管している遠軽町埋蔵文化財センターのご厚意により細石刃核など代表的な遺物の一部を図化させていただいた。今後、論文等に掲載し、公表する予定である。

### c) タチカルシュナイ第V遺跡

1972年に草地改良に伴って発掘調査が行われた。設定されたA・B・Cの三地点でそれぞれ二つの文化層が確認された（吉崎編 1973）。

A地点の第一文化層では有舌尖頭器を中心とする石器群、第二文化層では湧別技法札滑型細石刃核を伴う細石刃石器群が確認されたが、第一文化層は二次堆積の可能性も指摘されている。A地点表土では峠下型細石刃核と忍路子型細石刃核も出土しているとされる（辻・直井 1973）が、詳細は不明である。有舌尖頭器は立川遺跡を標式として設定された立川ポイントと、より小型だがやや作りが粗雑なものが出土し、後者は新たにエンガルポイントとして呼称された。両者は舌部が磨滅している点で共通する。

B地点の第一文化層では湧別技法白滝型細石刃核を伴う石器群、無遺物層の間層を挟んで第二文化層では峠下型細石刃核を伴う石器群が確認された（直井・石橋 1973）。

C地点の第一文化層（以下、上層）では湧別技法白滝型細石刃核を伴う石器群、第二文化層（以下、下層）では石刃製作技術を伴う石器群が確認された（須藤・平口・千葉 1973）。

上層資料には白滝型細石刃核のほか、ホロカ型細石刃核、札滑型細石刃核ブランクも含まれ、スキー状スポールにも湧別技法白滝型によるものと湧別技法札滑型によるものが含まれる。細石刃は幅狭のものと幅広のものに分けられ、前者は湧別技法白滝型によるもの、後者は湧別技法札滑型もしくはホロカ技法によるものと判断できる。

下層資料については、山田晃弘、千葉英一の両氏によって資料の報告及び分析がなされている（山田 1986; 千葉 1989; 村上 2007）。また、村上裕次氏は上層と下層では垂直分布だけでなく平面でも遺物の集中地点が分かれることを示したほか、母岩分類と剥片の属性分析を行い、剥片剥離技術の運用を明らかにしている（村上 2007）。編年的位置づけとしては、指標となるツールは確認できないものの、石器製作技術の特徴をもとに恵庭a火山灰下位相当と位置づけられている（山原 1996）。

第V遺跡の資料・調査記録等は複数の機関に分かれて保管されている。細石刃核などB地点出土資料の一部とA地点出土資料は遠軽町埋蔵文化財センターにあり、その他のB地点出土資料とA・B地点の調査記録が札幌国際大学に保管されている。C地点の出土資料と調査記録は東北大学にて保管している。調査時に採取された炭化物や土壌サンプルが保管されていることを確認できたものの、詳細な採取地点などの情報に欠けることから、扱

いには注意を要する。

また、湧別川流域史研究会所蔵の第V遺跡表採資料には、広郷型細石刃核も含まれることを筆者の実見にて確認している。

## II) タチカルシュナイ遺跡 1958 年調査記録

吉崎昌一氏はタチカルシュナイ遺跡群において M-1 地点を除くほぼ全ての発掘調査で中心的な役割を果たしており、この遺跡群の研究史を紐解くうえで最も重要な人物といえる。吉崎氏が教鞭をとった札幌国際大学には、氏が調査を行った遺跡の出土遺物や関連資料、蔵書などが寄贈されている（坂梨 2014）。その中に含まれる 1958 年タチカルシュナイ遺跡調査時の野帳について、札幌国際大学のご厚意により筆者が精査させていただいた。1958 年調査は本遺跡群で最初に行われた発掘調査であり、60 年が経過した今日では調査の詳細を知ることは難しい。遺物は東北大学・明治大学で保管されてきたが、双方とも調査記録は今のところ確認できていない。そのため、現状ではこの野帳が唯一の調査記録となる。

野帳には調査日誌、調査区配置図、層序柱状図が記されていた。調査日誌からは発掘調査の進行状況・参加者を把握でき、調査区配置図からは調査区の形状・面積を想定できた。また、層序柱状図からは調査区内の堆積状況のほか、おおまかな遺物出土層位を確認できた。調査の進行状況・参加者及び調査区配置・面積については初出の情報であり、貴重な資料といえる。堆積状況や遺物出土層位については過去に言及されたことがあり（Serizawa and Ikawa 1960）、それとの整合性を確認した。

## 4. おわりに

本研究では、遺跡群各地点の概要・調査歴をまとめ、現状で確認できた資料の状態を記述した。また、タチカルシュナイ遺跡 1958 年調査の記録として吉崎氏の野帳記載の内容を精査した。

各遺跡出土の資料内容をみると、後期旧石器時代終末期のものが多く、なかでも白滝型細石刃核がいくつかの地点で出土していることが分かる。白滝型細石刃核は細石刃石器群の研究開始当初から知られていたが、まとまって出土した遺跡はそう多くなく、石器群として不明な点も多い。近年行われた白滝遺跡群の発掘調査でも、白滝型細石刃核を主体とする石器群はほとんど出土していない。新たな調査による資料の増加がない一方で、数十年前に出土したものの十分に報告されていない資料が本遺跡群には多く存在している。少なくとも新たな遺跡が見つからない現状では、過去に出土した資料の研究を行うことが肝要といえる。発掘調査が行われた当時以上に、今日では本遺跡群の研究を行う意義が高まっているといえる。

しかしながら、本遺跡群は調査時から数十年経過している遺跡が多く、とりわけ 1958 年に調査されたタチカルシュナイ遺跡は発掘調査が行われてから今年で 60 周年を迎え

る。本研究において、調査時の様子的一端を明らかにできたが、未だ不明な点が多い。出土資料の分析と合わせて、今後も可能な限り情報収集を行う必要がある。本遺跡群の総合的研究が進めば、白滝遺跡群と同様に、白滝ジオパークの資源としての活用も可能となるだろう。

本研究が現在各機関で行われているタチカルシュナイ遺跡群の整理・分析に役立てば幸いである。

なお、本研究の成果の一部は 2017 年度北海道旧石器文化研究会にて発表するほか、『北海道考古学』第 54 輯への掲載が予定されている。

## 引用文献

- 坂梨夏代 2014 「吉崎昌一先生の業績 (1)」『札幌国際大学紀要』45, 121-127
- 須藤隆・平口哲夫・千葉英一 1973 「C 地点」吉崎昌一編著『タチカルシュナイ遺跡 1972 北海道タチカルシュナイ第V遺跡の草地改良にともなう旧・中石器時代遺跡の調査報告』:北海道遠軽町教育委員会 16-19
- 芹沢長介 1962 「北海道紋別郡タチカルシュナイ遺跡」『日本考古学年報』11, 48
- 千葉英一 1989 「タチカルシュナイ第V遺跡 C 地点下層石器群の再検討」 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会編『考古学論叢II』いわき:纂修堂 89-103
- 辻秀子・直井孝一 1973 「A 地点」吉崎昌一編著『タチカルシュナイ遺跡 1972 北海道タチカルシュナイ第V遺跡の草地改良にともなう旧・中石器時代遺跡の調査報告』:北海道遠軽町教育委員会 6-12
- 東北大学大学院文学研究科・東北大学総合学術博物館・仙台市富沢遺跡保存館地底の森ミュージアム編 2016 『企画展「アジアの中の東北日本旧石器時代」展示図録』 共催企画展「アジアの中の東北日本旧石器時代」([http://www.museum.tohoku.ac.jp/exhibition\\_info/other/asia\\_tohoku\\_kyusekki.htm](http://www.museum.tohoku.ac.jp/exhibition_info/other/asia_tohoku_kyusekki.htm)) 2017/12/13 取得
- 直井孝一・石橋孝夫 1973 「B 地点」吉崎昌一編著『タチカルシュナイ遺跡 1972 北海道タチカルシュナイ第V遺跡の草地改良にともなう旧・中石器時代遺跡の調査報告』:北海道遠軽町教育委員会 13-15
- 村上裕次 2007 「北海道タチカルシュナイ第V遺跡の石器製作技術—C 地点下層出土資料の分析—」 東北大学大学院文学研究科考古学研究室・須藤隆先生退任記念論文集刊行会編『考古学談叢』 東京:六一書房 25-58
- 山田晃弘 1986 「北海道後期旧石器時代における石器製作技術構造の変遷に関する予察」『考古学雑誌』71(4) 1-29
- 山原敏朗 1996 「北海道における細石刃石器群以前の石器群について—十勝地域の恵庭 a 火山灰降下以前の石器群の分析から—」『帯広百年記念館研究紀要』14, 1-28
- 吉崎昌一 1972 『昭和 46 年度 遠軽町彌生区 (タチカルシュナイ) 遺跡調査概要』
- 吉崎昌一編 1973 『タチカルシュナイ遺跡 1972 北海道タチカルシュナイ第V遺跡の草地改良にともなう旧・中石器時代遺跡の調査報告』:北海道遠軽町教育委員会
- Serizawa, C. and Ikawa, F.1960 "The Oldest Archaeological Materials from Japan." *Asian Perspectives* 2(2). 1-39